

江戸期昔話絵本「舌切雀」ものについて

—「雀の宿」(隠れ里)の変遷—

内ヶ崎 有里子

はじめに

江戸期に出版された昔話系絵本をここでは「江戸期昔話絵本」とする。現存する種々の江戸期昔話絵本は、延宝期頃から幕末までの長期にわたって出版されたものである。中でも「舌切雀」は、人間が福のある雀の世界を訪ねるといふ異郷訪問が、重要な要件である⁽¹⁾と見なされている。そこで本稿では、訪問先である「雀の宿」(隠れ里)への至り方やその描かれ方の変遷を中心に、江戸期昔話絵本「舌切雀」ものを考察したい。

一、江戸期昔話絵本「舌切雀」もの作品

表一に示したのは、江戸期昔話絵本「舌切雀」ものと見られる作品一覧である。本稿ではその中で、主に①～⑬の作品について検討する。現存する江戸期昔話絵本「舌切雀」ものの中で、刊行の最も早いのは赤小本(「した」)(作品①)とされているが、その他の作品については刊行が不明なものが多く、ここでは、草双紙の様式

として一般的に古いとされる順に並べた。⁽²⁾その他としてあげた作品は、後日漸などの改作もの、上方本、豆絵巻物などであり、①～⑬の作品とは別に扱うことにする。なお、②～④の作品、及び⑥～⑦の作品は、タイトルは異なるが、同版のものと判明されている。⁽³⁾赤本『したきれ雀』は「舌切雀」作品としては古く、その後の「舌切雀」作品を作る上で参考にされた形跡のあるものである。例えば、爺に弥五太夫という名前が付けられていること、爺に娘がいること、発端で爺が雀を助ける場面があることなどは、この作品以前の赤小本(作品①)にもうかがえるが、後の黒本(作品⑤など)、黄表紙(作品⑧)に共通して多く見られる要素となっている。特に黄表紙『兒漸舌切雀』(作品⑧)は、『したきれ雀』を参考にした形跡が色濃く出ており、赤本の詞書と絵柄をほとんどそのまま写している。黒本『大鳥毛庭雀』(作品⑤)は、泥棒や悪魔降伏の神の登場など他の「舌切雀」作品には見られない趣向の目立つ作品である。これは、他の絵本(表一その他にあげた上方本『今昔雀実記』など)や口承昔話を積極的に摂取した「舌切雀」作品といえる。例えば、子どもが爺に舞を舞わせることを条件に雀の在りかを教えるという趣向は、口承昔話「舌切雀」(大成一九一 A T 四八〇)に

ある「難題に答えたら、雀の在りかを教える」という趣向と類似している。ただ、口承昔話に見られる「馬洗い」や「牛洗い」の趣向は、管見の限り江戸期昔話絵本「舌切雀」には見られなかった。難題を出す点は共通していても、その内容が異なることは、口承昔話と絵本昔話の違いを示す一例ともいえると思われる。

表一 江戸期昔話絵本「舌切雀」もの作品一覧

[illegible]

黄表紙『古切雀三の切』。(十丁) 鳥居清長氏。市場通突作。天明二年刊。都立中央図書館、東京歴史文庫蔵。
『古切雀後日物語』
『古切雀繪巻』(一浦高光主)。江戶木蘭塲等。『古今書実記』。七・五丁。北尾辰崎斎蘭軒が字馬南樓刊か。故郷田代次氏蔵。
『古切雀繪巻』(二浦高光主)。江戸木蘭塲等。『思文閣本々資料目録』所収。豆板巻。『古切雀』歌川国綱画。アン・ヘリンズ氏蔵) など。

江戸期昔話絵本「舌切雀」もの作品には、(1) 爺が雀を養う (2) 雀は婆に舌を切られ放される (3) 爺が雀を探しに行く (4) 爺は雀方である。つまり、発端部分に、雀を養うに至る理由ともなる「爺が雀を助ける」という筋が付加された作品と、そのような筋が付加されず、

例えば、発端部分では次のような差異がある。作品①②③④⑧では「爺が子供たちに捕えられた雀を買い取る」場面が描かれているが、作品⑤⑩⑪⑭の場合は「爺が鳥に襲われている雀を助ける」場面、作品⑨では「爺が蛇に襲われている雀を助ける」場面、作品⑬では「爺が鷹に襲われている雀を助ける」場面になっている。ところが、作品⑥⑦では「爺が雀を助ける」のではなく「一つの蛤が雀に化し爺の所にとまる」という発端である。また、作品⑬⑮のように、爺が雀を養うに至る理由については触れずに話が始まる作品もある。つまり、発端部分に、雀を養うに至る理由ともなる「爺が雀を助ける」という筋が付加された作品と、そのような筋が付加されず、

ない作品がある
のである。一

図1 青本『新版 舌切すゞめ』

方、「爺が雀を
助ける」場合で
も、何者の手か
ら雀を救ったの
かについては、
幾つかのバリ
エーションが見
られる。

2 登場（人）

物について



表二は、江戸期昔話絵本「舌切雀」の登場（人）物・登場（人）物名をあげ、それが登場する作品番号を記したものである。その結果、爺・婆・雀・化物は全ての作品に表れており、婆は隣の婆より、爺の妻という設定が多く見られた。また、爺に弥五太夫などの名が付けられていること、爺に娘がありお梅などの名があること、下人新八が登場すること、発端に雀を捕える子どもが登場することは、赤本・黒本を中心に多く見られるが、その後の合巻や豆本では、ほとんど見られなくなっている。なお、図1は、（子供）の項「昔かたりをする子供」（作品⑥・⑦）の絵柄であるが、同様の絵柄は『再板 桃太郎昔語』（西村重信画 刊年未詳 都立中央図書館蔵）など他の昔話絵本にも見られる。このような絵柄は当時の昔話享受

のされ方を知る資料となっている点で注目される。

表二 江戸期昔話絵本「舌切雀」登場（人）物（作品①～⑬）

登場（人）物	作品番号（作品名は表1参照）
舌切雀	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
娘（実は舌切雀）	十六、七の女房⑤⑥⑦、美しき娘⑩
爺（弥五太夫、爺）	ふくおか弥五太夫②③④⑤、もも弥五太夫②③④⑤、弥五太夫⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
（婆）婆	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
隣の婆	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
爺の娘、むすめ	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
お梅	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
おしも	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
おちよ	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
雀達（舌切雀を除く）	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
化物	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
（下人）新八	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
下人（絵柄のみ）	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
（子供）雀を捕えていた子供	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
爺に舞を所望し雀の住みかを教える子供	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
昔かたりをする子供	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
隣の内儀	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
その他（鳥⑤、詞書のみ⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿、蛇⑨、鷹⑭、蛤⑮の、孔⑯の、むじな⑰の、うわばみ⑱、童⑲、悪魔降伏の神⑤、泥棒⑤、糞子とその娘⑩⑪、夫婦妻⑩、通行人⑨など）	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

三、「雀の宿」(隠れ里)の変遷

「雀の宿」(隠れ里)の変遷については、一概に述べることは容易ではない。なぜなら、「雀の宿」の描かれ方には、注目すべき複数の側面があるからである。そこで、次のような五つの項目を立てて、「雀の宿」(隠れ里)について、明らかにしていきたい。

1 「雀のお宿」と「隠れ里」

「舌切雀」の住みかは、作品中では「雀のお宿」または「隠れ里」と呼ばれている。「雀のお宿」は「したきりすゞめ、おやどはどこだちうくくく」(⑩豆本『したきりすゞめ』)のように爺の呼びかけの言葉の中に見える。それに対して、「隠れ里」は「すゞめのかくれさと門がまへ」(②赤本『したきれ雀』)や「ゆくほどなくすゞめのすみかにいたり。こゝはいづれのくにゝて何と云ところなり」とへば、かくれざとと云ところにて候なりとて……」(⑫豆本『舌切雀』)のように、詞書や舌切雀の言葉の中に見られる。また、黄表紙『舌切雀三の切』に

「したきりすゞめちよくく 五平は、むすめとふたりにてすゞめをたづねにいで、弥五太夫はともをつれていてけれども、こんどはともなしにて、よふくくとむかいにあい、こゝろのうちてよろこひ……。あなたさまはかくれざとでござりますか。よくござんじてござります。五平をかくれざとへつれ来たり」

とあることから、「隠れ里」は「舌切雀」を指す言葉としても使わ

れていたようである。

2 爺の呼びかけの言葉と「雀の宿」

次に、爺の呼びかけの言葉に注目して、「雀の宿」の成立について考えてみたい。まず、各作品に見られる爺の呼びかけの言葉を記す。

「したきりすゞめちよつくく」と (①赤小本「した」)

「したきれすゞめちよつくくくく」

(②赤本『したきれ雀』、⑧黄表紙『兒嘶舌切雀』他作品③④)

「したきりすゞめちよくくく」

(⑥青本『新版 舌切すゞめ』、⑦青本『再板 舌切すゞめ』)

「したきれすゞめちよいくくく」 (⑤黒本『大鳥毛庭雀』)

「したきりすゞめ、おやどはどこじや、チョコくくく」

(⑨合巻『昔かたり舌切寿々女』)

「すゞめどの、おやどはどこじや」

(⑩合巻『舌切雀お宿栄』、⑪豆本『往昔舌切雀』)

「すゞめどのく、おやどはどこじや」

(⑭豆本『新版 昔話舌切すゞめ』)

「したきりすゞめ、おやどはどここたチウくくく」

(⑫豆本『舌切雀』)

「したきりすゞめ、おやどはどこじやちうくくく」

(⑬豆本『舌切雀』)

「したきりすゞめ、おやどはどこだちうくくく」

(⑯豆本『したきりすゞめ』)

これらの例を見ると、爺の呼びかけの言葉の中に「おやど」が出

現するのは合巻や豆本であり、それ以前の赤本や黒本・青本などには見られない。これは、何を意味するのか。赤本や黒本・青本では「お宿はどこだ」という部分がないので、姿を消した雀に向かって漠然と呼びかけを行っていたかのように受け取れる。つまり、もと「雀の宿」を訪ねる明確な意志は存在していなかったのである。ところが、合巻や豆本では「お宿はどこだ」「お宿はどこじゃ」という文句が付け加えられ、最初から「雀の宿」を探すようになったのである。この変化は、「舌切雀」の話がある程度定着したために生じたと思われる。「舌切雀」の話が周知のものであれば、爺が最初から「雀の宿」を訪ねる意志を示してもそれほど不自然ではない。むしろ爺が最初から「雀の宿」を探した方が、後の「雀の宿」での持て成しの場面と呼応したものになるといえよう。

3 「雀の宿」への至り方

では、爺はどのようにしてその「雀の宿」に至ったのか。大別して(1)何者かの助けを借りて至る場合と、(2)偶然に爺自らの力で至る場合がある。何者かの助けを得る場合は、雀の場合が圧倒的に多く(作品①②③④⑧⑨⑪⑫⑭⑮⑯)、他は美しい娘の場合が一例(作品⑩)、子供の情況が一例(作品⑤)である。ただし、雀の力を借りて、つまり雀に連れられて「雀の宿」にたどり着く場合でも、雀が迎えに来る場合と、雀の迎えはない場合(偶然に雀に出会い、雀に伴われて至る場合)がある。

(1) 何者かの助けを借りて至る場合

雀(迎えの雀)に伴われて至るのは、作品①②③④⑧⑨⑯に見

られる。次に、作品①②⑨の例を記す。

a (三羽の家来らしき雀の絵柄)「おむかいにまいりました」

(①赤小本「した」)

b 弥五太夫、すゝめをふびんにをもち、お梅のを引きたづねに出けり。おやすゝめ、弥五太夫が心をかんじ、すげの松原迄むかいに出、礼を申してともない行、大ぶんちそうする(②赤本『したきれ雀』)

c せうすけおやこは……すゝめをこゝかしことたつねあるき、だ

んぐとやまふかくわけいりけるに、いちわのすゝめきたり。

せうすけにむかひ、「われらはそのもとさまにやしなはれすゝめのめしつかひなり。よくもこれまでたづねきたりたまふ。い

ざくこなたへ」とせうすけおやこをともしなひ、なをやまふか

くわけいりける(⑨合巻『昔がたり舌切寿々女』)

赤小本「した」や赤本『したきれ雀』には、a「おむかいにまいりました」やb「すげの松原迄むかいに出」のように、詞書に明確に「迎えの雀」が表れている。合巻『昔がたり舌切寿々女』の場合は、詞書には明確に「迎えの雀」であると描かれてはいないものの、状況から「迎えの雀」であると解せるのである。

(5) 偶然出会った雀に伴われて至る例は、作品⑪⑫⑮⑯(⑭)に見られる。その中から二例ほど次にあげる。

d かのぢうは、ある山のもとにてすゝめにふとであひ、ぶじをよろこびそれよりすゝめにいざなわれてすみかへいざなひ行けるが、すゝめはおやぢをおのがすみかへともなひ、やがてさい

子にもひきあわせ、いろ／＼ちさうなしける(⑪豆本『往昔舌切雀』)

e ある山道にてすゝめにあい「これは／＼おふたりさまどちらへ」ときけばしたきりすゝめのゆくへおたづねるよしをものがたれば、「それはわたくしのあに／＼やどにおりますれど、のりをなめすぎたうへにしたおきられてなんきいたし候まゝ、小野と申口申しやのくすりをたゞいまかにまいる道なり。ごあんないつかまつりませう」とともないける(⑫豆本『舌切雀』)

豆本『往昔舌切雀』には、d「ある山のふもとにてすゝめにふとであひ」とあり、出会ったのは偶然であつたことがわかる。また、豆本『舌切雀』では、e「ある山道にてすゝめにあいこれは／＼おふたりさまどちらへ」と雀が呼びかけ、自分は兄である舌切雀のために薬をもらいに行く途中であると告げているので、やはり偶然の出会いであつたと思われる。なお、deの例から、豆本『往昔舌切雀』の舌切雀は妻子持ち、豆本『舌切雀』の舌切雀は爺に出会つた雀の兄であることがわかり、この二作品においては舌切雀は男である。

偶然出会う雀がどちらかというと豆本類に多く見られ、迎えの雀がそれ以前の赤本や黄表紙類に見られることより、「迎えの雀」から「偶然出会う雀」への変化という一つの流れを汲み取ることができる。このような変化が生じた理由は幾つかあるが、発端部分との関連が特に注目される。「迎えの雀」が登場する作品は、爺が子

供や鳥などから雀を助け出す発端のものが多く見られ、絵柄化されているが、偶然出会う雀の方は、初めから雀が養われているという設定か、雀を助け出す発端があつても、詞書で軽く触れられる程度で絵柄化されていない。爺が雀を助けるという発端が消えたり、あるいは軽く扱われる程度であれば、雀の報恩は薄れ、雀が迎えに来るより、偶然に出会う方が理解し易い自然な展開となつたのではあるまいか。

一方、次のfgの例に見られるような、まず美しい娘を登場させ、実はそれが舌切雀であつたという趣向は、(2)「偶然たどり着く」場合として示した作品⑥⑦にも見られ、これは、近世期以前成立の説話物、例えば『かくれ里』『鶴の草子』などの御伽草子の趣向などとも類似する。なお、gに見られる、「子供に出された問題に答えて、雀の住みかを教わる」という趣向は、先に述べたように、口承昔話によく登場するパターンとして注目される。

f ある山かげのたけやぶより、ひとりのうつくしきむすめいできたり。ちゝにむかひて「おんみはいつぞやしたをきられしすゝめをたづねたまふや。さらばわかみといつしよにきたりたまふべし」と連れ行きける(⑩『舌切雀お宿栄』)

g 子とも、「まひをまはすゝめの所をおしへてやらんといふ」……ちゝ子とものおしへし道を正しきにたつねゆく。やまをくに二八斗のうつくしきむすめはたをおりてゐたりしかちゝをみて、「われこそしたをきられしすゝめなり」といふ(⑤黒本『大鳥毛庭雀』)

(2) 偶然にたどり着く場合

偶然にたどり着く場合は、作品⑥⑦⑬に見られる。作品⑥⑦は、雀を探してさまよい、ある家の前で一夜の宿を頼もうと声をかけると、十六、七の美しい女房が現れ、後にそれが舌切雀であるとわかるというものである。作品⑬は次のhの例にあるように、「雀の宿」を訪ねてさまよい、ついに「雀の宿」にたどり着く（途中、雀や娘などに会わない）ものである。

h 「したきりすゞめおやどはどこしや」とこゑをちからにさまよ
いしがついにすみかにたつねあたりて：（⑬豆本『舌切雀』）
このように、江戸期昔話絵本「舌切雀」に見られる雀の宿への至
り方は、雀に伴われて至る型が主流ではあるが、近世期以前の伝承
説話や口承昔話などの趣向を想起させる至り方も存在していたので
ある。

4 雀の宿（隠れ里）の描かれ方

爺が至った「雀の宿」（隠れ里）はどのようなものとして描かれ
ているのであろうか。

まず、外観（門構え）については、赤本『したきれ雀』（作品②
図2）の絵柄を見ると、刀を着けた家来の雀が、門の所で爺たちを
迎えており、「しらかべ作り」という詞書も見え、その外観（門構
え）は武家屋敷風である。黄表紙『兒嘶舌切雀』（作品⑧）の場合
も同様である。ところが、豆本『往昔舌切雀』（作品⑪図3）や豆
本『新板 昔話舌切すゞめ』（作品⑭）では竹造り、豆本『舌切すゞ
め』（作品⑮）では板張りの簡素なものへと変化している。外観

（門構え）を表す詞書も、「ひとつのもんをくぐれば、いときれい
なるげんかんありて」（作品⑩）や「やぶのうちに入りに見るにり
つばないえをかまへて」（作品⑮）など、抽象的なものになってい
る。

次に、座敷内部の様子については、作品⑥⑦の詞書にiのような
記述があるが、他の作品には、座敷内部の様子を示す詞書がほとん
ど見られない。したがって、絵柄によって、座敷内部の様子をうか
がうことにする。図4赤本『したきれ雀』（作品②）を見ると、右
上に床の間があり、掛軸（一部）、香炉、長煙管と煙草盆、高杯や
酒道具などが配されている。図5青本『新板 舌切すゞめ』（作品
⑥）では、さらに次の間の一部や丸盆、四角盆、銘々の御膳なども
描かれている。黄表紙『兒嘶舌切雀』（作品⑧）は、赤本『したき
れ雀』とはほぼ同様であるが、障子の代わりに襖が入っている。すな
わち赤本から黄表紙にかけては、座敷内部は、武家屋敷風、高級料
亭風に描かれている。ところが、合巻や豆本になると、料理の膳は
引き続き描かれているが、その他の道具類は省略化・簡略化され、
座敷の描かれ方は、御馳走の絵柄を除けば簡素なものになっている
（図6～図7参照）。ただ、合巻や豆本では、座敷内に葛籠を置く
絵柄も散見する。

i 此やのすまいのてい、かみの間の座敷十八畳、中の間十畳、そ
れより段々台所まではおびたゝしきくらしにはみゆれど、それ
にあわせてはかないにひとすくなし（⑥青本『新板 舌切すゞ
め』）

図2 赤本『したきれ雀』



図4 赤本『したきれ雀』



図3 豆本『往昔舌切雀』



図5 青本『新版 舌切すゞめ』



図6 豆本『舌切雀』



図7 豆本『舌切雀』



5 雀の宿（隠れ里）での持て成し

次に、「雀の宿」（隠れ里）において、爺が受けた持て成しについて、「御馳走」と、披露された「踊り」に分けて検討する。

(1) 御馳走について

御馳走の描かれ方を見ると、絵柄には描かれているが、詞書では御馳走の内容について特に触れられていない作品が多い（作品①②③④⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯）。例えば、赤本『したきれ雀』（作品②）の場合は、詞書に、

j 「御じい様、御ちそうにをどりを申付ました。お梅様、よふ御らんあそばしませ」（②赤本『したきれ雀』）

とあるだけであるが、絵柄には、三宝に載せられた頭付きの魚（鯛か）、高杯に載せられた菓子、酒、長煙管、煙草盆などが描かれている（図4）。

しかし、例としては少ないが、作品⑥⑦⑬は、絵柄・詞書ともに触れられている。作品⑥を見ると、詞書に、

k 人々をさしきにとほし、山海のちんぶつをもつてさま／＼ちそうせり。（弥五太夫）「此山中に、どふしてなまざかなござる。さて／＼きんねんの御ちそうかな」（⑥青本『新版 舌切

すゞめ』）

とあり、絵柄には、三宝に載せられた料理（刺身か）、四品程の料理の御膳、頭付きの魚と蓋付の椀物（御膳の横）、高杯に載せられた菓子（饅頭か）、酒、煙草盆、四角盆に盛られた料理などが描かれている（図5）。作品⑬の場合の詞書に

1 (雀) 「ほんのありやいのものでござります。まづ一つめし上
がりませ。もちまへのすゝめやきで さゝ一つあがりませ」

(爺) 「アゝきのどくせんばん」(13) 豆本「舌切雀」

とあり、絵柄には、三宝に載せられた料理(雀焼きか)、五品程の料理の御膳、頭付きの魚、蓋付の大碗・小碗、大鉢・大皿に盛られた料理、飯櫃、酒などが描かれているのである(図6)。なお、絵柄・詞書ともに触れられていないものも一例あった(作品5)。

御馳走は、jの例のように、詞書には特に詳しく触れていないものが圧倒的に多く、kの生魚、lの雀焼きのように具体名を出したものはわずかである。御馳走は詞書より絵柄に詳しく描かれており、しかも先に述べた外観、内部の様子に比べると、赤本から豆本まで一貫して豪華な本膳料理を描いたものが目立つ。これは、絵本としての見せ場の一つとなっていたことにも起因すると考えられる。

(2) 踊りについて

踊りは、作品①②③④⑤⑧⑩⑫⑬⑭⑮⑯に見られるが(作品⑨は詞書のみ)、詞書については、赤本・黒本・黄表紙の段階では、舌切雀や爺の言葉、三味線の音、唄、掛声などが入り、賑やかな踊りの場面が再現されている。なお、赤本『したきれ雀』(作品②)では、m「これは菊之丞がしたやりをどりじやの」「又とあるまい一代やっこ」「いよ／＼をらがせ川様め」「すゝ(めの)げいしやどもせ川がをどりし一代女のしよさ事大け／＼」などとあることから、雀の踊りは、菊之丞の槍踊り「一代女の所作事」(『一代奴一代男

一代女の所作事」か)であるとわかり、黒本『大鳥毛庭雀』(作品

⑤)では、n「たてかさもみやるにこれかだいがさかみゆる。これ

さ行れつそろへてぼつたてろ」「こゝしをかゝめてふれやれ／＼」

「ひげおとこ」などから、大名行列の槍振りの動作が舞踊化された

槍踊りであるとわかる。黄表紙『兎斬舌切雀』(作品⑧)の場合は、

o「これはきくのしやうがしたやりおどりじやの」「いよ／＼おら

がせ川様め」などが、作品②と同様「菊之丞の槍踊り」であること

は明らかであるが、作品②には見られない踊りも描かれている。そ

れは、o「すずめでせ、がつてんだ。よいやさのさ。ようをいとせ」

の部分であり、「雀踊り」かと思われる。その後の合巻や豆本にな

ると、pqに見られるように、「雀踊り」であることは記されるが、

踊りの内容についての説明は省かれてしまう。例えば、赤本、黒本、

黄表紙などに記されていた唄の文句や三味線の音色、道具名など、

具体的な踊りにかかわる詞書がほとんど見られないのである。つま

り、合巻期以降、踊りについては、主として絵柄で理解されるもの

になったと考えられるのである。したがって、赤本、黒本、黄表紙

の段階では、詞書を通して、踊りの内容や変遷(歌舞伎の舞台を思

わせる菊之丞の槍踊り↓大名行列の槍振りの動作を取り入れたとさ

れる槍踊り↓菊之丞の槍踊り+雀踊り)をうかがい知ることができ

たが、合巻期以降はそれが困難になってしまったといえよう。

m(舌切雀)「御じい様、御ちそうにをどりを申し付ました。お

梅様よふ御らんあそばしませ」(爺)「こなたのしたはなをり

ましたか。これは菊之丞がしたやりをどりじやの」むすめをも

しろかる。(爺)「しん八をもしろいの。ちとほめやれ」(新八)「いよ／＼をらがせ川様め」(三味線)「ちちんて／＼ちんちりつてつんちよんちり／＼／＼／＼つんてんいよい」(唄)「さまにあふてのあさかへり、けしきたのしむ男はたてに、又とあるまい一代やつこ、しかしこよいはかりねの枕、恋の中の町、御さきでふれ／＼、御ともでふれ／＼」弥(五太夫)ちそうに、すゞ(めの)けいしやどもせ川がをどりし一代女のしよさ事大でけ／＼(②赤本『したきれ雀』)

n かくてすゞめはぢ／＼にいろ／＼ちそうしてなぐさめける。

(唄)「たてかさもみやるにこれかだいがさかみゆる。これさ行れつそろへてぼつたてろ。ちんちんちんつ／＼ん。こゝしをかゝめてふれやれ／＼しと／＼んとろりとさ。お国さかいの松の木のかかりえだ」(若衆・奴)「しづかに。やつくるり。つりりんひげおとこ、かたつけよいやさ。あぶなふかてんだ／＼」

(⑤黒本『大鳥毛庭雀』)

o (舌切雀)「おじい様、こちそうにをどりを申しつけました。おむめ様よ御らんあそばしませ」(爺)「こなたのしたはなをりましたか。これはきくのしようがしたやりおどりじやの」むすめおもしろかる。(爺)「しん八をもしろいの。ちとほめやれ」(新八)「いよ／＼おらがせ川様め」(三味線)「ち／＼てん／＼チリ／＼つてとん」(檜踊りの唄)「さまにあふてのあさかへり、けしきたのしむおとこはだてに、又とあるまい一だいやつこ、しかしこよひはかりねのまくら、こいの中のでう、

おさきでふれ／＼、おともでふれ／＼」(雀踊りの唄)「すずめでせ、がつてんだ。よいやさのさ。ようをいとせ」(⑧黄表紙『兒喃舌切雀』)

p ちいはずゞめのかたとめられ、まいにちゆ／＼のもてなしにあひ、すゞめおどりのしよさをけんぶつなし、さてかぎりもなければいとまをなして……(⑩合巻『舌切雀お宿栄』)

q おやすゞめふうふのものは、かず／＼のさかなをと／＼のへ、さけをいたしてちそうなし、けんぞくどもにいひつけて、すゞめをどりをしてもてなしけり。(爺)「さて／＼これはおもしろい事しや」(親雀)「たかゞやぶのうちなれば、まことにさ／＼いなちそうでござります。めづらしくもござりませぬが、正じんのすゞめおどりといふところが、たゞちそうじや。はむしをこぼさぬやうによくおどつておめにかかけや」(⑬豆本『したきりすゞめ』)

次に、絵柄から、踊りについて考えたい。踊りの絵柄は、次の四つに分けられる。

○檜踊りを描いたもの(作品②③④)は芸者姿の檜踊り、作品⑤は若衆姿・奴姿の檜踊り

○檜踊りと雀踊りの両方(芸者姿の檜踊りと雀踊り)を描いたもの(作品⑧)

○雀踊り(編笠を被った集団の奴踊り)を描いたもの(作品⑩⑫⑬⑮⑯)

○雀の踊りだが、何踊りかは不明なもの(作品①)



図8 赤本『したきれ雀』

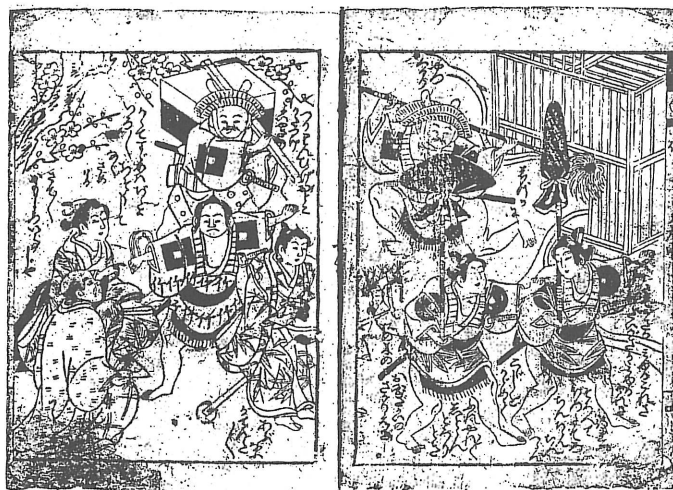


図9 黒本『大鳥毛庭雀』

図10 黄表紙『児嘶舌切雀』



なお、作品⑥⑦⑨⑪⑬⑭には踊りの持て成しは描かれていない。

図8〜図12を見ると、一つの方向性が見受けられる。赤小本では両手を広げて踊る三羽の雀が描かれるのみで、何踊りか特定できなかったものが、図8赤本で芸者姿の槍踊りとなった。その後、黒本（図9）に見られる若衆・奴姿の槍踊り、そして黄表紙（図10）に見られる芸者姿の槍踊り十雀踊りという具合に、槍踊りと雀踊りが混在するが、その後の合巻、豆本になると図11のように、編み笠を被った集団の雀踊りとして一本化されていくのである。そして、ついには図12の豆本のように、本文にはないものの表紙に雀踊りの絵柄を使う作品も現れるようになる。これは、「雀踊り」が絵本として重要な見せ場の一つとなり、表紙に使われるほど「舌切雀」の話の中で大きな位置を占めるようになったことを意味している。なお、「雀踊り」は民俗舞踊の一つで、編み笠をかぶり、奴の姿で踊る奴踊りであり、歌舞伎にも取り入れられていた。『役者世々の接木』（俳優堂夢遊著 安政六年刊 国会図書館蔵）に、天保七年のこととして、「見付には十三間の通屋體、辻々にはあかきつけようにしかけ、ぐるりには腹すだれをかけ、ぼんぼりを間毎につり、一様にそろひの衣装晒に稲にすだめの模様、緋ぢりめんに稲に蓬の帯をしめ、何れも地髪にて帽子を着て、三味線をひくなり…」と記されている。



図11 豆本『舌切雀』



図12 豆本
『往昔舌切雀』表紙

おわりに

以上、江戸期昔話絵本「舌切雀」ものについて、「雀の宿」（隠れ里）の変遷を中心に検討してきた。では、絵本としての「雀の宿」の変遷や変化をどのようにとらえたらよいのだろうか。単に作品成立時の作者の好みや流行によるもののだとは言いい切れまい。ここでは、可能性として考えられることを二つ述べておきたい。

まず、「迎えの雀」から「偶然出会う雀」が主流となることは、伝奇性（神話・伝説的要素）の捨象化、欠落化の現象ととらえることができないだろうか。仮に、鳥が幸福をもたらすという信仰が「舌切雀」に込められていたとすると、「舌切雀」は神格化された特別な雀ということになり、爺が探しに来るのを事前に知り得て迎えに出ることも納得がいく。しかし、そのような信仰が希薄になれば、あるいはそのような信仰を絵本に求めなくなれば、「迎えの雀」は不自然なものに感じられよう。「偶然出会う雀」の方が、筋の展開として自然でわかりやすいものとなる。なお、伝奇性（神話・伝説的要素）の捨象化、欠落化と思われる現象は、江戸期昔話絵本「花咲爺」「勝々山」ものにも見られる⁽¹⁰⁾。

次に、絵本とはいかあるべきかという、当時の絵本の在り方、特質の問題として、とらえることも可能ではないだろうか。試みに、この絵本の在り方、特質の問題について、表紙をめぐって考えてみたい。図13赤本『したきれ雀』（作品②）の表紙の絵柄は、発端部

分の絵柄で、子供が雀を捕えているところを、爺が銭を出して買い取り助ける場面である。それが図14黄表紙『兒斬舌切雀』では、銚子を持った婆が雀の舌を切る場面に変わっている。このことは、赤本では報恩譚の発端である「爺が雀を助ける」という場面に価値が置かれていたのが、黄表紙ではそのような報恩性よりも「婆が雀の舌を切る」というショッキングな事件、場面に、スポットが当てられることになったと考えることができる。しかも、黄表紙のこの場面は、赤本と異なり、「したきれ」ではなく「したきり」というタイトルとも呼応している。ところが、合巻『舌切雀お宿米』（作品⑩）や豆本『往昔舌切雀』（作品⑪図12）では、雀踊りが表紙化されている。これは、（他の合巻類に多く見られる）歌舞伎の図柄を表紙に取り入れたものと同様の、単なる流行の取り入れだけであるとは言いい切れない。表紙とタイトルの一致性よりも、人を魅き付ける華やかさを表紙に求めようとする考え方が（あるいは価値観）の変化である、ととらえることができる。できないだろうか。絵本が絵巻物などと



図13 赤本『したきれ雀』表紙

は異なり、表紙だけがます

人の目にとまり、売買されるという形態であったからこそ、生まれた変化、変遷といえるのではなからうか。

また、絵本昔話と口承昔話の関係については、前者は後者を元にして作られたと考えられるが、異なった特徴も見られる。これは、絵本という形態に起因すると予想される。例えば、口承昔話「舌切雀」にある馬洗いや牛洗いは図柄には馴染まず、江戸期昔話絵本「舌切雀」には取られていないこと、逆に御馳走や雀踊りなどは図柄によって、江戸期昔話絵本で詳しく描かれるようになっていいることである。⁽¹⁾口承昔話と絵本昔話がどのように影響しあって「舌切雀」の話が受け継がれていくのか、このことについては、稿を改めて考えたい。

いずれにせよ、このような江戸期昔話絵本「舌切雀」の作品のそれぞれが、江戸期の昔話を知るための貴重な資料と成りうるのである。江戸期における昔話の内容とその享受を知る上で、江戸期昔話

図 14 黄表紙『兒斬舌切雀』表紙



絵本研究の進展が果す役割は大きいと思われる。

注

(1) 黒木祥子氏が、「江戸の昔話絵本―舌切雀を中心として―」

(『語文叢誌』昭和五十四年)の中で「現存する舌切雀の絵本の中で、刊行の最も早いのは、天理図書館蔵の赤小本である。」と指摘されていることによった。

(2) 作品の表紙や絵柄、参考文献・目録等から、赤小本と豆本の

種別を示して並べたが、原表紙でない作品も多く、必ずしも明確なものとはいえない。特に黒本・青本の区別は明確ではなく、今日では黒本・青本は同類として扱われることも多い。なお、⑪と⑬の作品は、「所見所伝 小本型近世子ども絵本目録 その1」(『平成二年度科学研究費による草双紙研究報告書』平成三年 東京学芸大学)の中で、加藤康子氏によって「小本型近世子ども絵本」と称され、翻字されている。

(3) ②と④の作品については服部康子氏「赤本『舌切雀』について」(『学芸国語国文学』第十五号 昭和五十四年 東京学芸大学)の指摘があり、⑥と⑦の作品については黒木祥子氏(前掲論文)の指摘がある。なお黒木氏は青本『再板 舌切

すゝめ』の刊年を明和七年と推定されている。

(4) 「舌切雀」ではないが、黄表紙『昔々 桃太郎発端話説』

(山東京伝作 勝川春朗画 寛政四年刊 都立中央図書館蔵)

蔵)に「舌切雀お宿はどこじやちよくく。白木にするめ結納は婿じや。下着はすみれ、お江戸ははでじや」とあることから、黄表紙期にゆれが生じていると考えられ、また洒落になるほど使いこなされた文句であったともいえるのである。

作品⑩と作品⑭を括弧付けしたのは、次のようなどちらともとれる曖昧な描かれ方がされているからである。

「あるたかやぶのうちよりいちわののすゝめとひきたり。やれくおぢいさまようこそたづねてきてくだりました」

(作品⑩豆本『したきりすゝめ』)

「ふとむかふよりのすゝめいできたり。ぢゝにあひてさまただ、作品⑩の場合は、爺が来るのを知って積極的に飛び出して来たようにも取れるが、それに比べて作品⑭の場合は、

全くの偶然か、若しくは爺が来るのを知っていたとしてもさげなく現れたように描かれている。したがって、ここでは、作品⑩は「雀に伴われて至る」場合に、作品⑭は「偶然出会った雀に伴われて至る」場合に括弧付で入れた。

『近世子どもの絵本集』江戸篇(鈴木重三・木村八重子編昭和六十年 岩波書店)「したきれ雀」の注・解題による。

「雀の芸者が踊る檜踊りは、元文二年に初世瀬川菊之丞が中村座で演じたものとみられる。」とあり、初世瀬川菊之丞について「歌舞伎役者。元禄六年(また四年)生、寛延二年没。

上方出身の名女形。享保十五年顔見世に江戸中村座に下り、所作事で名声を博した。」とある。

「たてかざ」「たて笠」、「だいがさ」「台笠」とも、大名行列の際に従者が持参する代表的な道具であった。檜踊りは奴踊りの一種で、歌舞伎では奴姿、若衆姿や女姿で演じられていた。また檜踊りは、歌謡としても名を知られ、『松の葉』(『中世近世歌謡集』日本古典文学大系所収)に「振りやれお振りやれ大鳥毛の振袖、行列ぼっ立て東入り、ちとく」と歩行めされ、しつかとせ、檜はぢよんくぢよる……」とある。「大鳥毛」は、「たて笠」「台笠」同様、従者の持参する道具であり、作品⑤のタイトルの一部にもなっている。

(8) これは、人気役者菊之丞の檜踊りであることが、詞書に記されている。

(9) (注8)と同様に、詞書から、菊之丞の檜踊りであることがわかる。すなわち、赤本から黄表紙にかけては、絵柄と詞書の両面から、踊りを描こうとしているといえる。

(10) 赤本『枯木に花させ親仁』(画作者・刊年未詳 東洋岩崎文庫蔵)や黄表紙『古昔花咲勢親父』(画作者未詳 寛成九年刊 都立中央図書館蔵)では、犬が川上より流れて来て正直婆に拾われることから、この犬は最初から幸福をもたらす特別な犬として登場したとも思われる。しかし、合巻『赤本再興 花咲爺』(歌川国丸画 式亭三馬作 文化九年刊 国

会図書館蔵）や合巻『花咲爺誉魁』（歌川国芳画 西馬作

国会図書館蔵）など、他の作品には「川上から流れて来る犬」

でなく、元々飼われている犬として登場する。また、「勝々山」については「『かちく山』について」（内ヶ崎有里子

『叢』十三号 平成二年 近世文学研究叢の会）を参照され

たい。赤本『兎大手柄』（画作者・刊年未詳 大東急記念文

庫蔵）など初期の「勝々山」ものには爺が団子を穴に落とす

場面が描かれており、「団子浄土」の取り入れが見受けられ

た。が、後の豆本『かちく山』（芳虎画 刊年未詳 三康

図書館蔵）・『かちく山』（芳綱画 刊年未詳 三康図書

館蔵）などには見られない。これらの例も、伝奇性（神話・

伝説的要素）の捨象化、欠落化と思われる現象のように思わ

れる。

(11)

江戸期昔話絵本「古切雀」が長期にわたって出版を重ねるこ

とで、口承昔話「古切雀」が絵本の影響を受けて変容するこ

とも、可能性として十分考えられる。

参考文献

服部康子「赤本『古切雀』について」（『学芸国語国文学』第十五

号 昭和五十四年 東京学芸大学）

黒木祥子「江戸の昔話絵本——古切雀を中心として——」（『語文叢誌』

昭和五十六年）

加藤康子「所見所伝 小本型近世子ども絵本目録 その一」（『平

成二年度科学研究費による草双紙研究報告書』平成三年 東京学

芸大学）

内ヶ崎有里子「ちくとばうがあつたとき 大鳥毛庭雀」について」

（『平成二年度科学研究費による草双紙研究報告書』平成三年

東京学芸大学）

「草双紙における昔話もの——猿蟹合戦」「古切雀」

『勝々山』を中心に——」（『宇大国語論究』第二号 平成二年

宇都宮大学国語教育学会）

「江戸期昔話絵本のタイトルをめぐって——古切雀」

を中心に——」（『宇大国語論究』第五号 平成五年 宇都宮大学

国語教育学会）

『近世子どもの絵本集』江戸篇・上方篇（鈴木重三・木村八重子・

中野三敏・肥田皓三編 昭和六十年 岩波書店）

〔付記〕本稿は、日本口承文藝學會第十七回大会（平成五年六月六

日 東京都立大学）における口頭発表をもとにまとめたものであ

る。大会の席上、川田順造氏、小池淳一氏より有益なるご助言をい

ただいた。ここに記して感謝したい。しかし、本稿ではまだ充分に

両氏の御助言に答えられておらず、今後を期したい。また、本稿を

成すにあたり、資料の掲載を御許可下さった肥田皓三氏、国立国会

図書館・東京都立中央図書館・東洋文庫に感謝いたします。

（うちがさき・ゆりこ／愛知淑徳大学大学院）